

## 在外研究報告

### —フランスの音楽教育研究—

小 澤 純\*

Key Words : Double School, Lifelong Education

#### 始めに

フランスの音楽教育の特徴をキーワードとして二つ挙げるとすると「ダブルスクール」と「生涯教育」と考える。フランスでは「改良時間割学校」という名称の学校も設立され（全ての学校ではない）、そこでは午前中に一般（基礎）科目を学び、午後は芸術系の学校に行って選択したものを学べる。（音楽、ダンス等、但し美術は無い）フランス人はこれをダブルスクールとっていない（言わない）が、私（日本）から見るとこれは明らかにダブルスクールである。次にフランスでは音楽教育は5才から30才過ぎまで公的（公立）の機関で年間数千円という無料に近い負担で学べ、その後も興味がある人は国立音楽学校や公立音楽院で、夜間一退社後でも学ぶことが出来る。ここではクラスにもよるが年齢による制限は見られなかった。かなり幅広い年齢の人たちが合唱、合奏を楽しんでいた。

#### [ I ] フランスの（音楽）教育の概要

1789年のフランス革命以後、フランスでは各分野のリーダーを育てるべく Grandes Écoles

---

A Study on Musical Education in France

\* Jun Ozawa

Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University,  
196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted October 20, 2002. Published December 20, 2002.

が作られた。略してGE。(例として École Nationale d'Administration, École Normale Supérieure, École Polytechnique, École Militaire。この他に30校余りがあるとのことであるが、詳細を調べるには至っていない) パリ国立高等音楽院 (Conservatoire National Supérieur de Musique et de Danse de Paris) もその一つである。略してCNSMP。GEは他のいわゆる大学がバカロレア(大学入学資格)を取得していれば無試験で登録=入学できるのと違い、準備のために2年間のクラスに通いその後選抜試験を受けるという非常に厳しい条件を課される。但し音楽院はクラスによって入学年齢がまちまちなのでこの2年の準備は無く、それぞれのクラスの年齢制限にあわせて受験する。そこで優秀な成績を残すことは生涯ある保障となる。音楽の場合(2000年までは1<sup>er</sup>Prix=1等賞で、2001年の6月の卒業試験の成績からはDiplôme=免状)も優秀な成績を残すと同じ教授でも格が上の教授として任用されるなどの効力をもつ。これはある意味で階級社会を作ることになるが、私はいまだにヨーロッパ全体が階級社会であると思う。(例えば前パリ市長は珍しく国立行政学院=Ecole National d'Administrationの出身でないことで有名であった。フランス人で有名な政治家は全てこのENAの出身である)フランスの社会を理解するためにはこのGEを知っておくことは必要である。CNSMPは革命後の発足当初からGEとして設立された。目的はフランス独自の音楽を育てることである。というのは、当時はイタリアが音楽先進国であり、ついでドイツ語圏が古典派、ロマン派を通じて主流であった。その目論みは200年の時を経て19世紀の終わりから20世紀に入って達成されたと思う。そのような観点から見ると日本は西洋音楽の教育が本格化してからまだ実質50年程しか経っていないと考える。

フランスのもう一つの特徴としては一般の普通校においては、音楽教育は無い場合がある。これは美術も同じである。但し体育は必ず設定されている。その課程の編成は各校の校長=院長の決定に委ねられている。この院長の決定権の大きさは日本では考えられないことである。

## [II] 研究調査報告

### [1] フランスの音楽教育の構造

○まず殆どが公教育である。私学はあるが大変少なく、内容も分からないものが殆どである。その他は個人授業である。

○公教育は4段階、7種類である。(名称をフランス語で書くと大変長くなり意味も分かりにくいので日本語で表記する)

- 1) 国立高等音楽院            全国で2校    パリとリヨン
- 2) 国立(地域)音楽院       全国で36校    (地域の原語は幾つかの県が集まった規模の行政単位である。日本語に訳す場合は地方とか地域と訳す場合もあるが日本語の語感と違うので多くは国立音楽院と訳している)

- 3) 国立音楽学校 全国で101校  
 4) 市立(公立)音楽院または音楽学校 これに基準同意校と非同意校(国家基準を守る契約に)があるので7種になる。全国で701校(ちなみにドイツのこのクラスの音楽学校は1000校ある)

この中で上位2校に進学すると大体Double Schoolはせずに音楽の学習に専念する。これらの各校の違いは設立母体と規模の違いである。1)は100%国立であり、2)は国と地域、3)は国と市、4)は市または区が設立母体である。1)は文化省の管轄下にあり、院長は大統領により任命される。このパリとリヨンの2校のみ専門家を育てることを目的としている。これは日本で長いこと考えていたこととは違っていた。2)は10%程度1)に入ることを想定して学生を教育している。しかし2)~4)はアマチュアのための機関である。これらはCNSMPの院長との帰国前のインタビューから得た情報である。内容の程度は2)→4)で下がる。そして同じ名称であっても内容は場所によって違う。2)を卒業しても職業に就けると聞いたがこれは未確認の情報である。

私立は全国で15~20校程度と思うが実情は把握できない。これは資料に載っている名称だけでは公立が私立か判断できない名前があり、2~3校を除いて知られていない為である。有名校はパリにあり長い歴史を持っている。内容は2)か3)に当たるといのが聴講しての実感である。

## [2] パリ国立高等音楽院について

パリ国立高等音楽院(CNSMP)には現在大きく3つの分野がある。それは音楽、ダンス、録音技術(Son—フランス語の科目名)の3つである。これを含めて9つのセクションに分かれている。25年前に参観した当時と比べると、古楽、Jazz、教育学、そしてこの録音技術などが拡大、または加わり、実感としてはかなり規模が大きくなっていると思う。

この高等音楽院は運営を学校当局に任されていて、院長、9つのセクションの長、選ばれた教授たち、そして学生代表による委員会で運営事項を決定し文化省に上申するというシステムをとっている。これ以外の前章2)~4)の音楽院等は各運営母体の教育委員会による方針に従って運営され、その方針に則って各院長が各々の方針を決定する。

各科の授業は2年から5年で終了する。これはその専攻により最短2年最長4年、最短3年最長5年、3年または4年などのように期限が設定されており、期限内に必要な成績が取められない場合は全く0になる。前章でも一寸触れたが2001年から長いこと行われてきた1等賞(1<sup>er</sup>Prix)という言い方が無くなり、Diplômeに変わった。その免状の中にその専攻で得た成績が記入されることによりどのような成績を取めたか分かるようになっている。そして多くの専攻が今までと違って卒業試験の受験機会が1回になった。これはだらしな、または長く居たいという理由での留年をさせないという意味を持つが、学生にとっては非常に厳しい改革だと思う。何故ならば日本では殆ど分かっていないので評価がされないが、1等賞を取るのは将

来にわたる身分保障になるという点でフランスにおいては大変重要な事柄だからである。（例としてパリ郊外の市立音楽院の聴講時、フランス以外から来てフランスで音楽教育を受けていない優秀な音楽家にあったが、資格の点で上級の音楽学校の教授にはなりにくい一殆どなれないという話を聞いた）

この CNSMP に入学希望の学生には年齢制限があり、ダンスのクラスを除くと上限22才から32才までが5つのグループに分かれて実技系のクラスにあり、教育学は年齢制限が無い。

ここで特筆したいのが録音技術のクラスである。これは院長の説明によると音楽と科学の融合するクラスであり、芸術とテクノロジーの融合ということになる。カリキュラムを見ると音楽家として広い見識と実技を習得しながら最新の電子技術も習得するという羨ましいような科目である。このような録音技術の学校は他にも公立で理工科系の学校に在るとのことだが、ここでは音楽の授業は無く、放送局、CD制作会社等、音楽産業で働く場合は本当に音楽が分かっているという経歴を積めるのでこれからの時代のニーズに合う仕事が出来ると思う。これは音楽職という考え方を確立できる一つの行き方と思う。

### 【3】 聴講による実体験の報告ならびに私見

#### 1] 聴講活動について

今回の滞仏在外研究期間中アナリーゼ（楽曲分析）を中心に聴講した。それは自身で曲を分析できなくてどうして自己表現としての演奏が出来るのかという観点からである。それと日本ではこの分野の授業が非常に弱体で、作曲家が作曲のための分析を多く行い、それを授業として行うことは多いが、演奏のための楽曲分析を演奏家が行うことは少ないからである。踏み込んで言うならば日本では演奏家が楽曲分析を行う能力に不足すると考える。そのためにフランスでのカリキュラム、授業内容などの実地検分を行うことを研究、聴講の主軸とした。前期の4つの段階の内1) 3) 4) の3段階の音楽院と外部の一つの講座を聴講した。その内 CNSMP では、A, B, 本科という三つのクラス全てを聴講した。

その他にピアノ、ピアノフォルテ、音楽史、ソルフェージュ、歌曲伴奏、児童合唱、混声合唱、ブラスバンド、中世音楽アンサンブル、オーケストラ2校の聴講及び見学をし、帰国直前の2002年3月22日にジュヌヴィリエ国立音楽学校の混声合唱団と、日本人の女声合唱団でジョイントコンサートを行った。

#### 2] アナリーゼのクラスの実態

日本ではアナリーゼというと殆ど和声分析を行うが、フランスのアナリーゼ科で行うのは楽曲分析と訳せると思う。

方法を詳細すると二つの方法があったが、一つは、

- 1) まず何の予備説明も無く CD によりある楽曲を2回聞く。
- 2) 学生がとにかく何か気がついたことを述べる。それは構造、時代、形式、特徴、演奏形

態，作曲家を当てるなどできること全てを試みていた。

3) 次に教師が楽譜を渡すなどして細かく説明をする。その際は時代にも因るが部分的には和声分析も行っていた。

これは日本では見たことが無い方法であったが，フランスでは当たり前で各クラスの音楽院全てで行われていた。もう一つは，

教師が用意した楽譜（多くはオーケストラのスコアであったが）を学生に渡し5～10分の間に構造，形式，調性，和声の特徴等を出来るだけ書き込む，というこれは日本でも見られる方法であった。

ここで非常に大きな感銘を受けたのは，時代，構造，形式，調性，和声などの要素を学習した後それを使って分析してゆくのではなく，まず音楽を受け止め，次に現在の能力全てを使って分析を試みその後で理論，知識で確かめ，自分の能力を確立してゆくやり方である。それはまず感性で音楽を捉え，次に知識で確認することによって自分の感覚にしてゆくという事である。故に演奏に役立つということなのである。これは音楽史の授業も殆ど同じ方法であり，いずれも知識のためではなく，感覚，感性を育てるという方法がはっきりと感じられたのは特筆すべき事だと思う。

ここで授業に使われた曲の実例を記しておく。

#### ○クラス A

モーツァルト「ハフナー交響曲 メヌエット」，「ピアノ協奏曲 K<sub>v</sub> 491」，「フルートとハーブのための協奏曲」，「ドンジョヴァンニ第2幕の終わり」，シェーンベルグ「月に憑かれたピエロ」，ヴィヴァルディ「ヴァイオリン協奏曲 Op 9」，バッハ「チェンバロ協奏曲第6番」，「前奏曲とフーガよりフーガ，BWV 846, 849, 853, 867」，ドビュッシー前奏曲集第1集より「帆」，「西風の見たもの」，「ピアノの門」，「フルート，ヴィオラ，ハーブのためのソナタ」，バルトーク「弦楽器，打楽器，チェレスタのための音楽」，ラヴェル「スペイン狂詩曲」，ベートーヴェン「弦楽四重奏曲 Op 18-1」，「ピアノソナタ Op 81a」，「ピアノソナタ Op 110」，マーラー「大地の歌より青春について」，ドヴォルザーク「交響曲第8番」，「弦楽四重奏曲 Op 96 アメリカ」，リンドバーグ「クーラント」1952，ハイドン「ピアノソナタ HobX VI 20, 52」，ブラームス「ピアノ五重奏曲 Op 34」。

#### ○クラス B

ワーグナー「ペレアスとメリザンド」，ラヴェル「シェヘラザードより魔法の笛」，シューマン「弦楽四重奏曲イ短調」，プッチーニ「ラ・ボエーム」，ヴィットリア「オ マグナム ミステリウム」，バッハ「コラール ヴァリエーション」，「コラール」，マーラー「大地の歌より告別」，シューベルト「弦楽四重奏曲第15番」，バッハ「組曲について」，「シャコンヌ，ジグについて」，モンテヴェルディ「エコ モルモラル ロンド」，ベリオ「セクエンツァⅧヴァイオリンソロのための」。

#### ○本科

シュトックハウゼン「トラン」、ドビュッシー「ジュエ」、[「牧神の午後への前奏曲」、デュテ  
ィーユ「メタボール」、メシアン「天の都市の色彩」、[「黒つぐみ」、[「鳥のカタログより」、マー  
ラー「交響曲第4番」、シューマン「幻想曲 Op 17」、バルトーク「野外にて」、フォーレ「や  
さしき歌」、ベートーヴェン「交響曲第4番」、[「弦楽四重奏曲第7番」、モーツァルト「弦楽四  
重奏曲 Kv 589」、[「ピアノ四重奏曲ト短調」、ハイドン「交響曲第96番」、ルーセル「シンフォ  
ニエッタ」、バッハ「インベンション」、[「ブランデンブルグ協奏曲第3番」。

これらは予定表を手に入れた分であり、1年分すべてではない。

### 3] アナリーゼクラスの終了

このアナリーゼのクラスの終了、卒業は非常に難しいので、具体例を手に入れた B と本科  
については実際例を記述したい。実感として日本では B のクラスが音楽大学院相当と思う。  
しかしこの科目は作曲と楽理両方学んだものでなければ無理だと思う。そして本科は日本の音  
大の教授といえども作曲、楽理双方に通じた上で、フランス語に長けていないと卒業は出来な  
いのではないかと思う。ちなみにこれまでかなり多くの日本人が留学しているがこの本科を卒  
業出来たのは2人のみで、それもかなり最近のことである。

クラス B の例（このクラスは副科なので卒業とはいえないので終了とする）

#### 筆記試験

与えられた楽譜に出来る限りの分析を記入する。作曲者名などのデータは一切知らされない。  
したがって予め知識が無いと解答は不可能である。2001年度はこの課題がブルックナーの9番  
の交響曲であった。

調性、カデンツ、形式、和声進行、音型、オーケストレーション等。

2, 3 の設問

この曲の性格、作曲家、どのような書法か等。

テーマについての設問

いくつかのメロディーがどの曲の何楽章で、作曲家は誰等。

逆の設問

前問のテーマを実際の楽譜に起こす。

#### 口述試験

何かの曲を20分間カセットで聞き、その後試験官の前で20分発表し、審査員の様々な質問  
に答える。例えば作曲家は誰、何故そう思うか、その根拠、その作曲家の他の作品と比べ  
て特徴ある要素、オリジナルな要素等

2001年度はこの作曲家の例はウェーベルン、メシアン等であった。

#### 本科の例

##### 筆記試験 聴取の論述

予め試験官によって選択された作品を、CD を使って聞かせ作曲者、作品名、形式、主題の



区分、和声進行の特徴などを記述する。作品中の重要な主題等は聴音し楽譜を作る方が望ましい。

2002年6月の課題曲

- 1 バッハのカンタータ
- 2 ブラームスの弦楽五重奏曲の最終楽章ロンド
- 3 メシアンの「七つの俳諧」から中間楽章

最初の2曲は楽譜無しで与えられた紙に楽曲分析を記述し、3曲目は楽譜が受験者に与えられてアナリーゼする。

受験した学生よりのコメント

古典からロマン派までの楽曲に対しては受験者はCDのみでの分析を行うが、近代や現代の曲に対しては楽譜が与えられてそれを手助けに分析を行う。但しその場合はもう既にその曲を知っているのでなければ分析は困難となる。何故ならば近、現代の曲の場合は作曲者によって曲の様式や技法が明らかに異なる場合が多いし、特別な用語を使って文章を書かざるをえない場合がある。このメシアンの曲の場合、旋法、リズム、鳥の声についての論述が不可欠である。多くの受験者が3曲目の分析でこずっていた。

この試験は2時間半で行われた。

口述試験

与えられた楽譜を個室に入り1時間1人で熟読、分析しその後5人程度の試験官の前で口述する。各学生によって課題曲が異なる。2002年6月はロマン派の作品が課題として出た。

最終口述試験

1年間かけて分析した作品について40分間試験官の前で口述する。それに基づき試験官は様々な質問を受験者にし、受験者の分析内容が確固とした論理に基づいているかを判断する。分析内容が一貫性のあるものであることが求められるのと同時に、質問に的確に答えられることが必要である。

#### 4] 聴講した他のクラスの報告

○音楽史

音楽史はBのクラスを聴講した。このクラスは本科の次に高度な内容の副科である。ここでは2年間かけて中世から現代までを学び終了試験を受験する。授業は前述の通りアナリーゼのクラスに近い方法である。それはまず10～15分程度楽曲をCDで聞き、それに対して学生があらゆる要素を語れるだけ語る。その段階では20～25才の学生であるからかなり無理があり、語ることも推量であるがとにかく努力をする。その後教官が作曲家、作品、構成、特徴等を話し検討をする。

ここで学生はアナリーゼと同じくまず可能な限りの既知の要素を使って感覚で曲を受け取り、後知識で受け取ったもので確定する。これが感性として演奏を確立させる。史実を知るのは知

識のためではなく演奏に生かせる感覚を高めるためと言えよう。日本ではこのような授業は多く教科書を丸暗記して、点を取り、単位を取り後忘れる。であるから演奏に生きてこない。

この段階（20～25才頃）で学生は中世～現代の様々な様式，作曲家，作品にふれる。終了後は従って西洋音楽の世界を実感のある知識として俯瞰できるようになる。専門性が高く，教官も準備が大変と思う。中世など専門性が高い時代は，国立高等音楽院の教授といえども外部から人を招いて講義をしてもらっていた。この授業は1回1.5～3時間の授業で内容，充実度が高い。

#### ○歌曲伴奏科

この科は2年間で終了する。終了試験はフランス語，ドイツ語，時折イタリア語の歌曲をリサイタル形式で伴奏する。この音楽院の古くからあるピアノ伴奏科と言う最高度の科と内容が近い。出来てから7～8年の科であるがピアノ科より年齢制限は高い。したがって日本で大学を出ても入れるので2001～2年は日本人が3人在籍していた。内容は初見，スコアリーディング，オーケストレーション，移調などの能力が要求され，詩，詩人，時代背景などをピアノストが良く知っていることも要求される。フランス語，ドイツ語，英語は殆ど対等に使われる。時代背景を良く知ることで解釈が深まるのが良く分かった。この科に在籍している学生がソロのピアノのコンクールで良い演奏をするなど，伴奏者になるということを決めて学んでいるわけではなく，広く音楽を学ぶには色々な科目が在ると自由に考えているようでこれも日本との違いを感じる。

#### ○ピアノフォルテ科

日本ではフォルテピアノということが多い，少し前の時代の楽器であるピアノフォルテの科も非常に興味深く，1年間かなり多くの機会聴講した。この科の教授はこのCNSMPの卒業ではない。最近古楽，Jazz等には卒業生以外の教授が多くいる。この教授もスイス，ドイツでの教授歴を持つ人で，現在の国籍は不明だがフランスに在住し演奏活動もさかんで，2週間に1回2日ずつまとめて集中してレッスンをしていた。理論派ではないのでその面はどのように考えているか分からなかったが，感性は非常に高く，興味深く，音楽作りとしてはこれからの古典音楽の作り方を見せてくれるように思い大変感銘を受けた。以前から考えていたことに，この教授の方向を加味して帰国後に演奏会を企画した。

#### ○中世音楽アンサンブル

これはジュンヌヴィリエー国立音楽学校での聴講であるが，この教授は実はある曜日の午後の授業でまず児童合唱を教え，ソルフェージュを教え，ブラスバンドを指揮し，その後夜8：30～10：30まで大人の（私より年上が殆どと思う）クラスで中世の音楽のアンサンブル，楽器はヴィオラ・ダ・ガンバ，リュート，ヴィオール，中世の小型のハープ他，名前のわからない古楽器と混声の合唱のアンサンブルを，楽器を弾きながら指導していた。この経験は非常に驚かされるものであった。

まず第一にこのような広い範囲の指導が出来る人材，教育は日本では考えられない，これが



伝統ということであった。

次にこのような遅い時間に多くの人が実に楽しそうに、しかもかなり専門性の高い、日本では一部の専門家かマニアしかわからない音楽をごく普通の音楽活動として行っていることであった。

このような広い深い底辺の存在を分からなくしては日本の西洋音楽は本当の意味で根付くことは出来ないと思い知らされた。

## 5] 聴講から得た私見

今まで見知っていたことは表面または基礎部分であって、実態はずっと高く広く深かった。実感としては海に浮かぶ氷山と船の違いであった。例えば CNSMP をピアノで卒業するためには、以前は専攻のピアノで1等賞を取り、義務として取らなければならない室内楽、ソルフェージュ、和声等を終了する。現在ならばピアノのほか同じく室内楽、ソルフェージュ、アナリーゼ、初見、その他の選択のもの、例えば和声等を取って Diplôme を取得することによって卒業できる。多くの日本からの留学生は日本と同じくこれで卒業として留学を終わった。

ところがフランス人のある程度以上優秀な学生はこれでは終わらない。その上の音楽史、対位法、フーガ、オーケストレーション等を学び、その上の最上難易度の作曲科、アナリーゼ科、ピアノ伴奏科、指揮科、オルガン即興科等で学習を続ける。一流の音楽家になる優秀な学生はこのようにして7～9の科を卒業してきた。これは全てその科の教師になれるということなので日本風にいうと9回卒業したことになる。それだけの深い経験と見識を持てるその教育の内容を、今までは想像していたが、今回は実体験することによってその深さを身を持って実感した。これは学生の努力でカバーできる問題ではなく、誠に音楽というものへの認識の違い、それに基づく教育のシステムの違いである。

このような日本の音楽教育の問題点についてドイツの名教授として知られ、長らく日本においても教育、演奏活動をされたクラウス・シルデ教授にラドルフツェルの夏の講習でお話を聞くことが出来た。「日本の音楽教育に必要なことは」という質問に対しての答えは、まず「良く実際に歌う」、そしてフランスでいうフォルマシオンミュージカルにあたる「基礎訓練」を良く行うべきとのことであった。日本人の演奏に何が足りないかを的確に指摘されたように思う。もう一人パリで長く演奏、教育活動をしてられるピアニストから受けた意見の中で、「響きを知る」(西欧の石造りの建物の)ということは、音楽は教会の中で育まれてきた事を思うと誠に西洋で暮らさなければ出ない意見、感覚として感銘を受けた。

これは言ってみれば単に楽器の弾き方を学ぶのではなく、音楽を総合的に学び、それによって自分の音楽の現し方を考え作り出すということである。

20世紀は19世紀から引き継いだものが変化、発展してきたが、21世紀は前述の考え方を推し進めると各専攻がより深化、専門家してゆくと思う。そのためにもこれからは中世から現代までを広く識った上で自分の専門分野を絞ってゆく必要があると思う。特に日本では20世紀に行

ってきたような広く浅く何でも弾くというようなことは無理，または無駄になると思う。

このような点からこれからは留学というものの意味，意義を本当に考え，何を学ぶかを良く準備し，生活面もよく準備して行わなければ，ただ単に生活の地面を外国にするだけで，日本で学ぶのと変わらない行動になってしまうと考える。

### 〔Ⅲ〕 まとめ

1年間というこの深く考える時間を過しての一番の想いは、「音楽すること」はただ単に音を出すこと，楽器を弾くことではなく，自己を高め続ける中でその時自ら考える全ての自分を「音で表現する」ということである。そのため全ての行動をその音による表現に向けなくてはならない。であるから自己を上げることと，深めることは同時に為されなくてはならない。このときどう考えるか，どのように行動するかについての先導が日本では殆ど無い，これが一番の問題と考えた。’98年より始めた「演奏表現学会」はこのことの具体化のために始めたが，まだ各人の思考，行動において端緒についたばかりである。いかにしてこれをそれぞれの行動にするかが火急の課題である。

その上で実感として欧米と日本の差はどんどん開いてきていると考える。これからは欧米で評価の定まったものを取り込むという後追いでは追いつくどころか差を詰めることも出来ないと思う。

これからの課題として欧米に先行するためのシステムを「総合基礎」という考え方の基に進めるつもりである。

最後にこの1年の締めくくりとしてインタビューをお願いした現在のCNSMPの院長の言葉を記載する。

- 1 これからも教えるものは変わらないだろう。ただメソッドは変化して行くだろう。（テクノロジーの発達に伴い）
- 2 現状のレベルを維持するために我々は10年先を見て改革している。

### 参考文献

渡辺裕 「西洋音楽 演奏史論序説」ベートーヴェン ピアノ・ソナタの演奏史研究 春秋社 2001年  
\*尚参考資料は大量に持ち帰ったが公刊されたものではないので掲載しなかった